

母と母乳と乳母

— 一七世紀オランダの授乳画考 —

小林 頼子

オランダのボイマンス美術館に一枚の絵がある（図1）。作者は、ロッテルダムに一六三一年に生まれ、一六九八年に亡くなったヨースト・ファン・ヘール。やや先行する世代の、「精密な仕上がり」を得意とするハーリエル・メッツト、カスパル・ネツチエルらの強い影響を受けた画家である。ここで取り上げる作品も例外ではないが、事モティーフの扱いに限っていえば、いささか異彩を放つところがあるようだ。

描かれているのは、室内の二人の女性と赤子。赤いスカートをはき、座る女性は、茶色の胴着と白いシャツの

前をはだけ、豊かな乳房をのぞかせる。どうやら彼女は、膝の上の赤子に乳を含ませていたようだ。傍らの籐の幼児用ベッドのいかにも暖かそうなシートと毛布の乱れた様子は、いましがたまで赤子がそこに寝ていたことを窺わせる。赤子は、女性の乳に左手をそつと置きながら、首をひねり、顔を上方に向ける。その視線の方向には、白の頭巾、白い毛皮の縁取りの赤の上着、黄色のサテンのスカートを身につけた女性が立つ。彼女は右手に白い小さなものをつまみ、前方に差し出す。座る女性の後ろには彫刻付きのなかなか立派な暖炉が、そして立つ



1 ヨースト・ファン・ヘール《母と乳母のいる室内》、1665年頃、ボイマンス美術館、ロッテルダム



2 ヨーハン・デ・ブリューネ『エンブレマータ』(アムステルダム、1624)より

女性の後ろには画中画が見えるが、作品の状態からして、詳細は見定めがたい。各モチーフの配置、素材の質感表現、人物の表情の把握等々、いずれもなかなか出色のできばえの作品である。

さて、この授乳の場面だが、一体、赤子の母はどちらの女性だろうか。

一七世紀後半から一八世紀初めに画家、列伝作家、美術理論家として活躍したアルノルト・ハウブラーケンは、一七一八―二一年に上梓した『ネーデルラントの男性・女性画家の大劇場』の中でくだんの作品に言及し、次のように述べている。「私の手元にファン・ヘールの作品が届いた。描かれているのは膝の上に子どもを抱く乳母と傍らに立つ母である。母は、白い毛皮付きの赤いビロードの服を優雅に身体に巻きつけ、黄色のサテンのスカートをはいている。彩色は薄めで、髻の描写は自然である。彼女は赤子と遊んでいる。あたかも赤子の気を砂糖で乳母からそらせようとしているかのようだ²⁾」。つまり、ハウブラーケンは、立っている女性を母、座って

いる女性を授乳のために雇われた乳母だと理解したのである。美術館では、この解釈を受けて、作品のタイトルを《母と乳母のいる室内》としている。しかし、研究者のなかにはこの見方に異議を申し立てる者もいる。当時の授乳をめぐる論調からして、授乳している女性こそが母に違いない、というのである³⁾。では、その論調とは、どのようなものだったのだろうか。

先学の研究からもすでに明らかのように、赤子への授乳をめぐるのは、古来、多くの議論が重ねられてきた⁴⁾。

たとえばブルタルコスは『子どもの教育』のなかで「母たる者は、私の考えでは、自分の子どもをみずからの母乳で育てねばならない。彼女たちは授乳にはるかに大きな愛情と配慮をもって臨む。子どもを心の奥底から、いわば脚にいたるまで愛しているからである。乳母と養育係の愛情は、これに対し、うわべばかりの偽りであり、彼らは給金のために愛そうとする。自然は、母が新たに生まれた子どもを自らの母乳で育てるべきことを

認識させる」、母に二つの乳房が備わっているのはそのためだ、と主張する。⁵⁾ くだって一四世紀のキリスト教の修道士ヴァンサン・ド・ボーヴェも、「もし可能なら、子には実母の乳を含ませるべきである。まずは、その乳が母の体内の滋養、つまり月経の血が乳に変わったものだからだ。子は母の乳を好んで飲む。それは自然なことだ。試みに母の乳房を子どもの口に運んでみれば、それははつきりする」と、母による授乳の重要性を訴える。⁶⁾ 一方、一六世紀のオランダの人文主義者エラスムスは、

「里子に出すことは母親たることの半分を見知らぬ女性に譲り渡してしまうことだ」と母親たちを牽制した。⁷⁾ 母性、子どもの自然な求めを強調するこうした議論のほかに、乳母に預けると乳から乳母の悪い素行までもが受け継がれてしまう、乳は血が白くなったものだから、といった危惧の声も上がっていた。⁸⁾

母親による授乳の必要性は、その後、一七世紀に入っても連綿と説かれ続けた。乳母に乳児の養育が任されるという現実がなかなかやむことがなかったからだ。上

層階級においては、女性は公私にわたり容姿を保たねばならぬ立場にあった。働かねばならぬ女性には育児は足枷となった。子宮と乳汁は深く関連すると考えられていたから、授乳期間は房事を避けねばならず、夫の理解が必要であった。一方、乳母を引き受ける方の女性にしてみれば、里子を育てることは貴重な収入源になったことだろう。⁹⁾ しきたり、生活上の必要、利便さ、はやり……現実の暮らしは、道徳的な建前をやすやすと受け入れられるほど甘くはなかった、ということだろう。

ところが、一七世紀のオランダではいささか事情が異なっていた。

たしかに依然として母乳による保育の重要性は執拗に繰り返されていた。たとえば人気国民詩人ヤーコプ・カツスは、「若き女性よ、大切なかの神の贈り物、／かの母乳を含ませて、汝の果物たる幼子の渴きを癒せ」、「汝の潔い乳のみが幼子の叫びを鎮められる」、「子を産むだけでは一人前の母ではない、／子に乳を含ませてこ

そ完璧な母となる」¹⁰⁾、だから、乳母に授乳を任せてはならないと訴えている。彼の友人で医者でもあったヨーハン・ペーフェルフェルトも、乳母を雇ったときに起こる様々な恐ろしい出来事——乳を含ませながら火の前で寝入ってしまった乳母、酔って意識を失い、赤子を溺れさせてしまった乳母、預かった赤子を病気の赤子と取り替えてしまった乳母など——で読者を恐れさせ、母乳を含ませることは道徳心と知力をはぐくむことでもある、だから子どもは自ら母乳で育てよと、論陣を張った。¹¹⁾

しかし、彼らの言葉は、それ以前の主張とは違い、必ずしも憂うべき里子の横行を変えるために発せられたものではなかった。なぜなら、一七世紀の初めにオランダを旅行したイギリス人旅行者フエイネス・モリソンが「オランダの母親たちはほとんど例外なく子どもにみずから授乳をしている」と記しているように、現実が彼らの言葉を肯定する方向へ変わりつつあったからだ。¹²⁾そしてこの傾向は一七世紀半ばになるとさらにいっそう強

まった。乳母に授乳を依頼するのは、母体に何らかの事情があるときに限られていた。しかも、そのようなときでも、里子に出すのではなく、自宅に授乳にきてもらい、済んだら帰宅してもらおう、という通いの方式だった。¹³⁾だからこそ、寝ている妻をベッドに残し、夜泣きする赤子をあやす男性の姿が描かれたりしたのであろう（9頁の図2）。ちなみに、乳母となった女性の一日の授乳料は四〜六スタイフェル、当時の単純労働者の日当の三分の一ほどにあたる額だった。¹⁴⁾

こうした現実を反映してか、一七世紀オランダの風俗画には母による授乳の場面を描いた作品が目立って多い。たとえばピーテル・デ・ホーホの描く窓辺で授乳する市井の女性（15頁の図3）。彼女が乳母ではなく母親であることは、毛皮付きの着衣の贅沢さから明らかだ。脚の下には足温器、傍らには火の熾きた暖炉が見える。授乳の場面にお定まりのモティーフだが、赤子に風邪を引かせない配慮を示唆するのだろう、ちなみに、母親の頭上の鳥籠は、結婚した女性が身を置くことになる甘味

なる（配偶者への）従属的愛の状態を示す。暖炉の脇では子どもと犬が遊んでいるが、犬にえさをやる子どもは、家庭教育の大切さを強調するオランダのことわざ「親が歌えば、子どもは笛を吹く」をまさしく体現する。それは母の授乳を真似た行為だからである。¹⁵⁾

おもしろいことに、子どもと犬を除けば、構図の大枠は、一五世紀に描かれた《火除けの聖母子》（15頁の図4）とほとんどかわらない。¹⁶⁾ 暖炉の前に座る圧倒的存在感の髪の長い女性。毛皮付きの豪華な衣装、背光のような頭部の後ろの籐の火除け、玉座をほのめかす椅子の獅子飾りが、彼女がマリアであることを教えるが、その他の細部はどれも色濃い日常性を漂わせる。部屋のしつらえは豊かな世俗の暮らしを髣髴とさせるし、窓外に広がる町には屋根の修理に余念のない市民の姿も見える。しかし、何よりも印象深いのは、長く細い人指し指と中指で乳頭をはさみ、薬指で乳房を押すマリアの胸元の描写である。イエスはその少しへこんだ豊かな乳房から顔を離したばかりなのだろうか。その仔細な観察には、乳や

授乳が宗教的シンボルであることを忘れさせる強烈なりアリティーがある。デ・ホーホが《火除けの聖母子》を知っていた可能性は低いとしても、聖母と幼子イエスの授乳の姿が母と子という枠主題になり、個別の主題の差を超えた視覚的財産として画家たちの間に受け継がれていたということは十分にありえよう。¹⁷⁾

一七世紀オランダ風俗画では、かなり上層の富裕層に属する女性も授乳の姿で描かれた。デ・ホーホと同時代の画家ハーブリエル・メッツターの《育児室訪問》はその一例である（15頁の図5）。古典様式を模した大型の暖炉、ベッドの緑のビロードの囲いと装飾的な支柱、床に敷かれたタペストリー、机の上の銀器は、この一家が、デ・ホーホの描く家庭にもまして豊かな暮らしを享受していることを示唆する。育児室を訪れたエレガントな装いの女性に、女中は壁際からさつそく椅子を運び、この家の当主は帽子をとってうやうやしく挨拶をする。相当の賓客のお目見えのようだが、若い夫婦は、すでにこの訪問を知らされていたのか、贅沢な服に身を包んでい

る。いかにもフォーマルな場面である。にもかかわらず、着ぐるみの赤子を膝に抱く若い母親は、胸をはだけ、乳房を誇らしげに見せる。授乳をしているのだ、という強いメッセージが伝わってくる細部である。描かれているのは実在の人物だったといわれている。母としての麗しき徳をアピールする狙いで注文した作品なのである。

ファン・ヘールの作品(図1)に戻ろう。もし座っているのが乳母で、立っているのが母であつたら、母による授乳という当時流布していた現実や理念を大きく踏み外していることになる。だから、先に紹介したハウブラーケンの説明に反対する研究者は、そんな絵が描かれるはずがない、座っているのが母であり、立っているのは子どもを待ち受ける誘惑の世界の擬人像だ、彼女が何かを差し出し、赤子の注意を引こうとしているのはそのためだ、と主張する。ヘリット・ダウの《授乳する母》(図6)に登場する少女は、ガラガラで赤子の気をそら

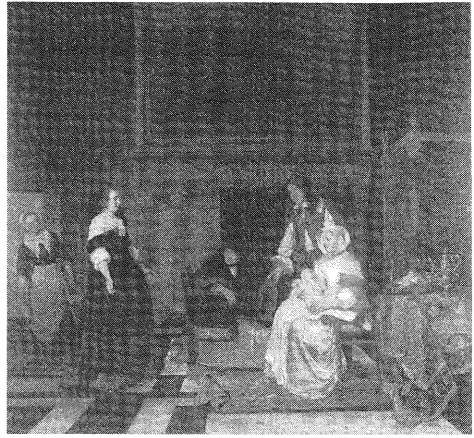
そうとしているが、それは赤子が陥りやすい世俗の誘惑を、したがって、早いうちからの教育の必要性をほめかす。くだんの研究者はそれと同じ意図がファン・ヘールの絵にもある、立っている女性はダウの少女に相当する、というのである。¹⁸⁾

しかし、筆者の見るところ、座っているのが乳母であることに疑いの余地はない。彼女の服装は、立派な暖炉を備えた家に住む女あるじにしてはあまりに質素に過ぎる。むしろ、手伝いの立場にある女性が身につけるにふさわしいものだ。¹⁹⁾よく見れば、赤子の服の襟の辺りには金糸の縫い取りが見える。座る女性と赤子の属する階層は明らかに異なっている。とすれば、ハウブラーケンも言うように、座る女性が乳母、贅沢な服を着て立つ女性が赤子の母というのが無理のない理解になろう。しかもファン・ヘールのこの選択は、必ずしも孤立したものである。同時代の風俗画家ヤーコプ・オヒテルフェルトも、乳母に授乳を任せる女性を描いているからである

(図7)。²⁰⁾



3 ピーテル・デ・ホーホ《授乳する女性と子供と犬》、1658—60年頃、サンフランシスコ美術館



5 ハーブリエル・メッツー《育児室訪問》、1661、メトロポリタン美術館、ニューヨーク



4 ヤーコブ・ファン・カンパン追隨者《火除けの聖母子》、1440年頃、ナショナル・ギャラリー、ロンドン



6 ヘリット・ダウ《若い母》、1660年頃、ゲメルデ・ガレリ、ベルリン

7 (右) ヤーコブ・オヒテルフェルト《育児室》、1671—1673年頃、ケープタウン



では、ファン・ヘールは、当時の授乳論に逆行する図柄をなぜ選んだのだろうか。

先に挙げたカツツの授乳論は、実は「結婚」という書の一部をなしている。²¹⁾ 女性は勤勉であらねばならない、そのための訓練には針仕事が最適である、結婚前は親に従い、結婚後は夫を助け、子どもを教育し、家事を淀みなくこなさねばならない……そして、母は授乳の義務を負う……。つまり、母による授乳の主張は、願わしい女性、願わしい家族、願わしい母、というカツツの理念を構成する駒の一つであった。しかもカツツのこの主張は多くの読者の支持を集めていた。一七世紀の授乳をテーマにした多くの風俗画は、現実の反映であるとともに、時代が求める理想の母の姿を視覚化したものでもあったということだ。メッツの若い母親がフォーマルな場で乳房を露わにする理由もそこにあるのである。

ただし、時代の理念はいつも正攻法で提示されるとは限らない。たとえば、男女の遊ぶ姿を描いた風俗画の多くは、悪徳の行いを通じて、見る者を美徳へといざな

う。見る者は、娼家の情景から避けるべき教訓を学び、居眠りをする女中から避けるべき怠惰を教えられる。一七世紀オランダの風俗画は、楽しみと教訓が交錯する場であり、その振幅は、視覚言語にそなわった自在さに応じて、驚くほど大きい。²²⁾ とすれば、ファン・ヘールの《母と乳母のいる室内》が往時の慣習とは逆方向から授乳論を絵画化し、あるべき授乳のあり方を訴えているとしても、さして驚くにはあたらないだろう。それは一七世紀オランダの風俗画がはらむ表現の多様さの証しにはかならないからだ。

にもかかわらず、現代を生きる研究者が、一七世紀の理念に反するからと、乳母を母と取り違えて解釈しようとするのであれば、それは、「母と子」という概念がそれだけ現代において重く、問題含みのテーマになりつつあることを示しているのではないか。絵画ばかりか、絵画をめぐる解釈もまた、時代の理念を如実に映し出す澄んだ鏡にほかならないのである。

(目白大学)

註

- 1) 本作品は題してF.N. Schadee, Rotterdamse Meesters uit de Gouden Eeuw (exh. cat.), Historisch Museum Rotterdam, 1994-1995' cat. no. 18, p. 184に詳しく。
- 2) A. Houbraken, *De Groote Schouburgh der Nederlandsche Konstschilder en Schilderessen*, vol. 3, 1721, p. 40
- 3) F. Durantini, *The Child in Seventeenth-Century Dutch Painting*, Michigan, 1983, pp. 16-21
- 4) K. Arnold, *Kind und Gesellschaft in Mittelalter und Renaissance*, München, 1980, pp. 89-186.この16世紀以前の授乳の言及した資料が採録されている。17-18世紀になるとF.L. クニヒェール他『母親の社会史』、中嶋公子他訳、筑摩書房、一九九四(原著1977) pp. 109-124を参照。
- 5) Arnold, op. cit., p. 70より引用。
- 6) Idem, p. 115より引用。
- 7) Idem, p. 175より引用。
- 8) クニヒェール『土権書』pp. 114-115
- 6) 同' p. 113
- 10) A. A. Sneller et al., *Jacob Cats Huwelijk*, Amsterdam 1993 (原書45-161五初版)。p. 113
- 11) S. Schama, *The Embarrassment of Riches*, London, 1987, pp. 539。『土権書』のW. E. Franits, *Paragons of Virtue*, Cambridge, 1993, pp. 111-116を参照。
- 12) P. C. Sutton et al., *Von Frans Hals bis Vermeer* (exh. cat.), Philadelphia Museum of Art, 1984, pp. 196-197
- 13) H. Brugmans, *Het Huiselijk en Maatschappelijk Leven onzer Voorouders*, vol. 1, Amsterdam, 1915, pp. 128-131
- 14) 同' p. 131
- 15) P. C. Sutton, *Pieter de Hooch 1629-1684* (exh. cat.), Dulwich Picture Gallery 1998 et al., pp. 120-121
- 16) 作者'制作年代はF.L. Campbell, *National Gallery Catalogues. The 15th Century Netherlandish Schools*, London, 1998' pp. 92-99に詳しく。
- 17) Schama, op. cit., p. 540参照。
- 18) 註10を参照。
- 19) 例えはフェルメールの『手紙を書く女と召使』(National Gallery, Dublin) の'茶の服の召使の比較がれた。
- 20) S. D. Kuretsky, *The Paintings of Jacob Ochterveld (1634-1682)*, Montclair (N. J.), 1979, cat. no. 73, fig. 84参照。
- 21) 註10を参照。
- 22) E. de Jongh(ed.), *Tot Lering en Vermaak* (exh. cat.), Rijksmuseum, Amsterdam, 1976を参照。p. 25。